

On certain projective modules for finite groups of Lie type

大阪市大・理 津島行男

Yukio Tsushima

K を標数 $p > 0$ の代数的閉体とし, q を p のべきとする。

$GL(n, q) \supset G_0$ を古典的線形群

$SL(l+1, q), Sp(2l, q), \underbrace{\Omega(2l+1, q), \Omega_{\pm 1}(2l, q)}_{(直交群)}, ST(l+1, q)$
(斜交群) (直交群) ($2=7$)-群

とすると, G_0 は Steinberg module St とよばれる K 上 $|G_0|/p$ 次元の既約加群をもつ。 St は projective であり, また G_0 の複素加群に持ち上げることもできる。 $V = K^m$ を自然に G_0 -加群とみると, V は既約である。 Lusztig は $q \geq 3$ ならば $G_0 = GL(m, q)$ に対し, $St \otimes_K V$ が直既約 projective であることを示した (1974)。 その後奥山によつて $V = K^m$ が $SL(l+1, q)$ と $Sp(2l, q)$ についても正しいことが示された (1984)。

このことはこれまでにあげた古典的線形群すべてに対して拡張することも試みる。 G_0 を統一向に取り扱うためには, Chevalley gp. とは Steinberg gp. と見ると都合が良い。 また表現論的には $\overline{G_0}$ universal Chevalley (又は Steinberg) gp. G におきかえてよい。 G は K 上の G の上にある (即ち K 上の) 半単純代数群の有理表現の G への制限として V の既約 G -加群が得られた。 この立場に立つて以下大雑把な方針を述べてみる。

1. 記号と準備

\mathfrak{g} を複素数体 \mathbb{C} 上の A_e, B_e, C_e, D_e type の単純 Lie 環, \mathfrak{h} をその standard Cartan subalgebra, Δ を \mathfrak{g} の \mathfrak{h} に関するルート系, Π を単純ルート系, Δ^+ を正ルート全体, W_Π を Δ の Weyl 群とする。 $\alpha \in \Delta$ に対し $h_\alpha \in \mathfrak{h}$ を α の coroot とし

$$X = \{ \mu \in \hat{\mathfrak{h}} ; \mu(h_\alpha) \in \mathbb{Z}, \forall \alpha \in \Delta \} \text{ とおく。}$$

$\mu \in X$ が dominant であるとは $\mu(h_\alpha) \geq 0$ ($\forall \alpha \in \Delta^+$) を意味する。 $\Pi = \{\alpha_1, \dots, \alpha_e\}$ とおき $\omega_i \in X$ を $\omega_i(h_{\alpha_j}) = \delta_{ij}$ と定めると $\{\omega_1, \dots, \omega_e\}$ は X の \mathbb{Z} -basis となる。 ω_i は fundamental dominant weight とよぶ。 X^+ は dominant weights 全体の集合とする

$$X^+ = \left\{ \sum_{i=1}^e a_i \omega_i ; a_i \in \mathbb{Z}^+ = \{0, 1, 2, \dots\} \right\}.$$

G_K^u を \mathfrak{g} による \mathbb{Z} 定義とする K 上の universal Chevalley grp. とする; $G_K^u = \langle \alpha_\alpha(t) ; \alpha \in \Delta, t \in K \rangle$.

G_K^u の Frobenius endomorphism σ を次のように与える:

$$\sigma(\alpha_\alpha(t)) = \alpha_{\tau(\alpha)}(\varepsilon_\alpha t^\theta)$$

ここで τ は identity かつ $\forall \varepsilon_\alpha = 1$ 又は τ は A_e, D_e type の Dynkin 図形上の order 2 の symmetry かつ $\forall \varepsilon_\alpha = \pm 1$ である。

$G = (G_K^u)^\sigma$ を σ の fixed points のなす有限群とする。最初にあげた古典群は G の central subgp. にある factor grp. とする。

G_K^u の irreducible rational modules (over K) は X^+ による \mathbb{Z}

parametrise せよ, \mathcal{L} の代表系は $\{L(\lambda); \lambda \in X^+\}$ と表せよ。

\Rightarrow λ は $L(\lambda)$ の highest weight である。一方 G の既約加群 (over K) 全体は $X_g = \{ \sum_{i=1}^{\ell} a_i \omega_i; 0 \leq a_i \leq g-1 \} \subset X^+$

と表せ $\mathcal{L} = \{ L(\lambda)'; \lambda \in X_g \}$ と表せよ。ただし $L(\lambda)' = L(\lambda) \uparrow G$

である。例として $L(0)'$ は trivial module, $L((g-1)\rho)'$ ($\rho = \sum \omega_i$)

は Steinberg module である。一方 $G \rightarrow G_0$ を通じて $V = K^n$

を G -module とする $V = L(\omega_1)'$ である。ただし

$$\omega_1(\text{diag}(t_1, \dots, t_n)) = t_1, \quad \text{diag}(t_1, \dots, t_n) \in G_0$$

(g が B-type の場合は $\omega_1(\text{diag}(0, t_1, \dots, t_{\ell})) = t_1$)

$$\lambda, \mu \in X, \quad \mu - \lambda = \sum r_i \alpha_i \quad (r_i \in \mathbb{Q}) \text{ と表せるとき}$$

$$\lambda \leq_{\mathbb{Q}} \mu \iff r_i \geq 0 \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

$$\lambda \leq \mu \iff r_i \in \mathbb{Z}^+ \quad (i=1, 2, \dots, \ell)$$

と約束する。

また $\lambda \in X_g$ に対し $\lambda^0 = (g-1)\rho + \omega_0 \lambda$ と表せ $\lambda^0 \in X_g$ である (\Rightarrow $\omega_0 \in W_{\mathbb{R}}$ は $\omega_0 \pi = -\pi$ とする唯一の元)。

既約 G -加群 $L(\lambda)'$ ($\lambda \in X_g$) の projective cover を $\mathcal{U}(\lambda)$ と表す。

St は projective であるから $St \otimes L(\lambda)'$ も projective であり, したがって

$\{ \mathcal{U}(\mu); \mu \in X_g \}$ の直和で表せよ。Jantzen [1]

に次の事が示す (2 De type の場合も含めた proof は津島 [3] 参照)。

ル-ト系 Σ とし, W_J を Σ の Weyl 群とす。parabolic subgroup $\tilde{P}_J = B_K^\vee W_J B_K^\vee$ と考へ $\tilde{L}_J = (B_K^\vee)_J W_J (B_K^\vee)_J$ を Σ の Levi subgroup とす ($(B_K^\vee)_J = \langle \alpha_\alpha(H); \alpha \in \Delta_J, \alpha \in K \rangle H_K^\vee$)

$P_J = \tilde{P}_J^\sigma$, $L_J = \tilde{L}_J^\sigma$ とおくと L_J は split $(B_J N_J)$ -pair of characteristic p をもつ群となり, 特に Steinberg module St_{L_J} をもつ。 ($B_J = ((B_K^\vee)_J)^\sigma$, $N_J = N_{\tilde{L}_J} (H_K^\vee)^\sigma$)

complex character としての St は

$$St = \sum_J (-1)^{|J|/r} (1_{P_J})^G$$

である。 π は Π の τ -stable subsets を動かす, $|J|/r$ は J の τ -軌道の個数である。また $St|_{P_J} = (St_{L_J})^{P_J}$ であり, $(St, (1_B)^G) = 1$ となる ($B = (B_K^\vee)^\sigma$)。 ψ を V の Brauer character とすると St の projectivity より

$$m_1 = \dim \text{Hom}_{K^G}(St, St \otimes V) = (St, St \cdot \psi) \quad (\text{指標の内積}).$$

よって Frobenius の相互律より

$$m_1 = \sum_J (-1)^{|J|/r} (St_{L_J}, \psi|_{L_J})$$

となる。以下 $m_J = (St_{L_J}, \psi|_{L_J})$ とおくと $m_J \in \mathbb{Z}$ 計算する。上の公式は ψ として V の Brauer character をとると同様であるから (Lemma 2 の言ひより) m_K に対しても通用する。 G_0 の対角部分群 H の形ははっきりとわかる。 ψ は

$\psi = \psi$ かつ $\psi \geq 3$ の場合 $G_0 = \Omega(2l+1, \delta)$ を除くと、すな

わりの $m_J = 0$ が容易にわかる。すなわち

Theorem 3. $g \geq 3$ とする。

$$(1) St \otimes V = \begin{cases} U(\omega_1^0) \text{ if } G_0 = SL(l+1, g), Sp(2l, g), \Omega_{\pm 1}(2l, g) \\ \text{or } SU(l+1, g) \\ U(\omega_1^0) \oplus St \text{ if } G_0 = \Omega(2l+1, g) \end{cases}$$

(2) $G_0 = SL(l+1, g)$ or $SU(l+1, g)$ のとき

$$St \otimes \bigwedge^k V = U(\omega_k^0) \quad (1 \leq k \leq l)$$

proof. (1) の前半は easy. $\Pi \supset J$ を τ -stable とする。

$m_J \neq 0 \Rightarrow \text{Hom}_{L_J}(St_{L_J}, V|_{L_J}) \neq 0$, i.e., $St_{L_J} \otimes V|_{L_J}$.

特に $V|_H$ は H -inv. な $\bar{\alpha}$ (= highest weight vector) を持つこととなるが、これは $\Omega(2l+1, g)$ 以外では不可能である。

$\Omega(2k+1, g)$ の場合、 $p=2$ ならば " $Sp(2k, g)$ と自然に同型なので"、 $p>2$ とする。このとき $V=K^n$ の first unit vector は H で fix されるので $m_\phi = 1$ である。 $J \neq \phi$ のときは highest weight vector は Borel subgroup B で fix されることはない。よって $m_J = 0$ となり、 $m_1 = 1$ が得られる。

(2) の証明は (1) が easy ならば "が"、 $\bigwedge^k V$ の weight の状態と H の作用からやはり $m_J = 0$ が之より $m_k = 0$ を得る。

3. $g=2$ の場合

この場合 $H = (H_k^4)^{\wedge} = 1$ が universal Chevalley grp. G にあて成り立つので Theorem 3 の議論は通用する。実際符号

べきの和 $m_1 = \sum (-1)^{|J/\pi|} m_J$ を直接計算する (= ととなり), 最終的には 2 項係数に関する 2 つの恒等式が決め手となる。結果は \square を記しておく。

Theorem 4 $SL(l+1, 2)$, $Sp(2l, 2) \simeq \Omega(2l+1, 2)$, $\Omega_{\pm 1}(2l, 2)$ に對し,

$$St \otimes V \simeq U(\omega_1) \oplus St$$

Theorem 5 $SL(l+1, 2)$ に對し

$$St \otimes \bigwedge^k V \simeq U(\omega_k) \oplus St \quad (1 \leq k \leq l)$$

Theorem 6 $ST(l+1, 2)$ に對し $(1 \leq k \leq l)$

$$St \otimes \bigwedge^k V = \begin{cases} U(\omega_k) \oplus St & \text{if } l = \text{odd and } k = \frac{l+1}{2} \\ U(\omega_k) & \text{otherwise,} \end{cases}$$

文 献

- [1] J. C. Jantzen: Representations of Chevalley groups in their own characteristics, Proc. Symposia, AMS 47, part 1 (1987), 127-146.
 [2] 奥山哲郎: BN-pair をもつ有限群の p -block theory, 「群とその表現」研究集会報告集 (1984), 176-185.
 [3] 津島行男: On certain projective modules for finite groups of Lie type, Osaka J. Math. (1990) vol. 27, 949-962.